

長瀬 隆

第二次世界大戦で樺太は失われたと著者は語り、その故郷喪失は、今次大戦の傷痕全体の中の一部ではない事を訴えている。戦争四十年の道程の中で、戦争の影は消える事なく、むしろ

劇はその姿を表に現しその恐怖を人類に永却に伝える機会をあたえた。

樺太よ遠く孤独な

しかし日本の北の地「カラフト」の戦傷は関係者以外はあまり知られてはいない。著者は戦傷のキズ跡を

で協力する日本人中学校の記事に疑問をもった日々を苦しく綴っている。第一章・美しき湖のほと

り、の村から、はじまり、第六章・樺太よ遠く孤独な、で終章、叙情的な筆の流れの美しさは著者のかくされ

さまままな苦悩と生活齟齬への疑問は懐疑の落し子として全体の隅々に暗い影絵を創り戦後四十年たった今もまだ続いている。樺太に生まれ、樺太に育った人達で、樺太の敗戦後の生活を体験してない人々に是非この「心の傷跡」を読んでいただきたい。

(西田書店刊 一五〇〇円)

樺太 厚紙 関紙 機 上

(郵便物認可)

読む

長瀬 隆著

「樺太よ遠く孤独な」

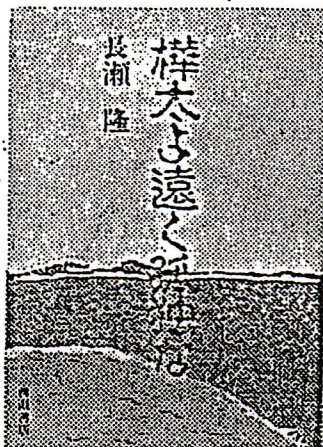
「私は何に成るにせよ、未来の自分という者が樺太に生れ育って引揚げるという事と無関係に存在できるとは思えなかった。私の未来はまさにそのことによって強く規定されるはずなのである。」

故郷とそこにおける原体験、幼児体験がその人の一生を決定してしまうことは、この著者に典型的にあらわれている。戦争と敗戦、カラフトという故郷喪失と、ソ連に対する懐疑。著者はそれを四十年にわたつ

「抱きつづけてきたのだ。戦争は終わり、戦後すら遠くなったが、戦争の傷は消えたわけではない。戦争の傷跡は、長崎、広島、沖

戦争は終わり、戦後すら遠くなったが、戦争の傷は消えたわけではない。戦争の傷跡は、長崎、広島、沖

係者以外にあまり知られていない。私自身もカラフト生まれであり、この著者と同世代である。敗戦後、ソ連民政



戦争の傷跡 魂のうめき

縄に深く残って、世の人の目にも触れる機会が多い。しかしかつての日本の北方の地カラフトの戦傷は、関

けによるのではない。戦争を知らない若者たちにも、この書を読んでもらいたい。歴史が教える以上のもの、戦争にいたためつけられた魂のうめきを読みたいであらう。自分史アームと言われるが、自分史が個人を超えて、国や民族や社会と深くかわる時に、真にすぐれた自分史になることを、この書は語ってくれる。いささか叙情に流れた文体だが、著者の奥さんも原爆被爆者という傷を負っている。

(西田書店 一、五〇〇円)

川辺 為三・作家